

第一〇話 『未知の星を求めて』エピソード 二

一九九八年ごろ講演会があつて福井県武生市の松本敏一さんのお家を訪ねたことがあります。その時「サインを」と言つて持つてこられたのが初版本でした。どこの講演会へ行つても必ず本をもつて熱心な方が後で話にこられますが、「未知の星を求めて」には三つのバリエーションがあり、最初が東京のある印刷会社が発行した、彗星のカラーの表紙の文庫本で、二回目「三恵書房」が一九七三年に出したB六の表紙に無数の星の流れをデザインした綺麗な本です。そして三回目が一九九〇年ごろ私が自費出版した今の地味な表紙の本です。

聴衆の方がどの本を持つてくるかで、大体の年齢が分かります。懐かしい最初の本を持つている方は、若くても五〇歳をとつくに過ぎているはずです。松本さんとは最初の本を発行したときからのお付き合いで、ご長男に「勉」と名付けられた事でも如何に私を愛し尊敬して下さいるかわかります。松本さんは優れた彗星の観測者であるわけです。

が、最近彼の名を芸西で発見した星に付けたのも松本さんに対する尊敬と感謝の念からです。その彼に、

「この本でどこが一番気に入りましたか？」

とお尋ねしたら、即座に、

「同じ敗北するにしても、自己の最善を尽くした上で敗れたよ」

と言う自己への叱責の言葉に感動した、といってくれました。

そうですね、忘れていました。私が発見前の一九六一年の九月「三嶺」と言う深い山へ登り、峻険な斜面と嵐に行く手を遮られ苦闘していた時、彗星の発見を志しても一向に成果の挙がらない自分を見つめ、「まだまだ努力がたりないんだ！」と自分自身を叱責した言葉でした。

そうですね！あの深い谷の中で私の思想が変わり再び発見の情熱が蘇ったのでした。

私は今でも、何処へ行く時でも、あの本をバイブルの如く身に付け持っているのです。